

シンポジウムのまとめ

司会 美 頭 千不美

第二十二回の若手ゼミ・シンポジウムは、「認識論はどこへ行く?」という今日的テーマを掲げ、パネリストに筑波大の鬼形彰夫氏、岐阜大の稲生勝氏、東北大の松本俊吉氏を迎えて、伊豆半島は突端に近い温泉と漁港の町下田で、暑い夏の一日、開催された。

当日の報告は午前中から松本氏、稲生氏、鬼界氏の順に行われ、時間厳守を貫くべく援用されたアラーム付きストップ・ウォッチを眼前に置かれた所為か否か、各報告者とも規定の三十分で報告を終わらせた(尤も、松本氏は報告内容を端折ることよりも猛烈なスピードで話すことの方を選んだのであった)。その後、昼食を挟んで午後から二時間の討議に入ったが、フロアを交えた討議へと移るに先立ち、最初の三十分ほどをパネリスト間の意見交換に割くという手続きを取ったのは適当であった。それぞれ異なる観点からテーマに迫った三氏が互いの主張の絡み具合を多少なりとも確認し合えたばかりでなく、他の参加者にも三者の立場が随分見えやすくなったと思う。

ところで、松本氏は広くゆるやかに解された「基礎づ

け主義」の認識論を評価する立場に立った。氏の報告は、「権利問題」に哲学固有の問題有りとしたカントのいわゆる超越論哲学を基礎づけ主義の典型と捉える一方、基礎づけ主義と対比し得る諸立場(例えば、認識の対象である存在自体のうちに既に客観的实在性が具わっているとする实在論。或いは認識主観の側から対象に加えられる拘束性ではなく、逆に歴史・社会・行動といった外部から認識主観の側に加えられる拘束性に注目する弁証法的唯物論ないしプラグマティズム)が、われわれに依る規範の視座を欠いているという点を指摘するものであった。

続く稲生氏の報告は、マルクス主義哲学の反映論に立脚し、且つ認識の「主体」である人間と「客体」である自然との双方に互いを規定する能動性があるとする立場に立って為された。特に科学との関係で論じられた今回の氏の報告は、現代諸科学のもたらす成果が却って「人間とは何か」、「人間の思考とは何か」といったわれわれに固有の問いを改めて哲学に対し投げかけているということ、従って、諸科学の知見を充分に踏まえながら新たに科学を、そしてわれわれの生を(すなわち哲学を)基礎づけ得るような当代の認識論が今や待望されているということを中心とするものであった。

これら二つの報告に対し、言わば分析哲学の成果に則つて論を展開したのが鬼界氏である。氏は、科学的知識の根拠を問う「基礎づけ主義」の認識論が、近代ヨーロッパの知的パラダイムに限界づけられる「歴史的エピステモロジー」であったという観点から、近代的認識論のパラダイムを超えて在り得るような普遍的理念を探るという方向で報告を行った。すなわち、17世紀以降、カントを経て論理実証主義へと受け継がれてゆく基礎づけ主義的な認識論の目標（一切の前提・先入見なしに認識の条件を確立すること）は実現不可能であるとして、その理論的な存在意義を否定するクワイン、ローティの議論に拠りながら、しかし、氏は認識論の可能性を探求する上での一つの手掛かりを、知識が存在論や倫理学の中で問われた古代ギリシア哲学の知識論的パラダイムに見る。

例えば東北大の菅沼氏が問うように、「自然化された認識論」の議論の果てに基礎づけ主義としての認識論がなお可能であるとすれば、その具体的な課題と方法とは何であるのか。松本氏は自己関係知の基礎づけが哲学的認識論として今後とも可能であるとするが、その方法に関して、未だ検討の段階というところであろう。また、慶応大の河野氏が稲生氏に問うたような、自然科学と人文科学との境界設定あるいは科学と非科学との demarcation

lineをどのように設けるのかも、われわれの今後の課題と言えよう。さらに、国際基督教大の矢嶋氏に問われて鬼界氏が答えた今後の課題としての知識の定義とは如何なるものになるのか。

立場を異にして為されたそれぞれの報告は、多方面に分岐して存在する認識論の現況を垣間見させるものであった。また、認識論の多元化というこの事態が今後急速に終息するとも思われない。三つの報告から共通に窺われるように、われわれの時代の哲学が、われわれの有り得べき生の希求と切り結びつつ語られる時には、認識の問題はむしろさまざまな角度から常に問われ続けることになる。従って、認識論は今後とも何処へか向かってゆくであろうが、それは哲学が無くならない限り、無くなりはないであろう。

ともあれ、若手ゼミならではの愉快で刺激的なシンポジウムになったと思う。末筆ながら、認識論に精通しているとは言えない私のお粗末な司会にも拘らず、その卓抜きにして魅力的な発言によって今回のシンポジウムを一つの知的興奮の場にまで高めて下さったパネリストの方々、そして鋭い切れを感じさせる質問によって会を大いに盛り上げて下さった参加者の皆さんに、改めて感謝する次第である。（みとう ちふみ 法政大学）